

## 女子大学生の友人関係に関する研究

—友人とのつきあい方が自己開示に与える影響—

岡部 未来<sup>1</sup> ・ 秋山 幹男<sup>2</sup>

### A Study on Female Students' Friendship

-Self-disclosure as Influenced by How They Associate with Each Other-

Miki OKABE<sup>1</sup> and Mikio AKIYAMA<sup>2</sup>

#### 問 題

自己の内面的な世界を他者に知らせるという行為は、社会的な存在としての人間には欠かすことのできないものであり、誰もが日常いたるところで経験している（榎本 1997）。日常のかつ重要な現象を「自己開示（self-disclosure）」という概念を用いて心理学的研究の対象としたのは、Jourard（1958）である。彼は、自己開示とは他者が知覚しうるように自分自身をあらわにする行為であるとした（1959）。

自己開示の機能として、安藤（1989）は、①「感情表出」②「自己明確化」③「社会的妥当性」④「対人関係の発展」⑤「社会的コントロール」⑥「親密感の調整」の6つを挙げている。また榎本（1986）も、自己開示の意義として①「自己への洞察を深める」②「胸の中にたまった情動を発散する」③「親密な人間関係を促進する」④「不安を低減する」の4つをあげている。

このように、自分にとって重要な他者に対し、十分に自己開示できるということは、健康なパーソナリティにとって必須の条件となる。自己開示が日頃身近な人間関係の中でなされていると、健康なパーソナリティを維持し、発展させていくことができると考えられる。素直に自己開示できる親密な関係を身近な人間関係の中にもつということは、精神的健康の増進のためにも必要なのである（榎本 1997）。

青年期は大人へと向かう発達期であり、児童から青年へと変化していく大切な時期である。一方、急激な身体変化に伴い、精神的にも不安・動揺する時期でもある。青年期の悩みや問題は、どちらかという大人には話しにくいことが多く、青年にとって悩みを打ち明けることのできるのと同じ悩みを抱える彼らの友人であろう（松島 2004）。

また女子では、男子よりも人間関係が精神生活上大きな位置を占めることが明らかにされており、大学内で十分自己開示できる親友を持つことは、精神衛生上からも、より豊かな発達のためにも重要である（根本 2001）。

---

<sup>1</sup> 広島文教女子大学人間科学部心理学科助手

<sup>2</sup> 広島文教女子大学人間科学部心理学科教授

自分のことを省みると、誰でも自分の状態をわかってほしいという気持ちを持っていることに気がつく。しかしながら、「その気持ちを十分に理解してくれる人が、あなたにはいるか」と問われると、本当の友達が自分にはいるだろうか、親友がいるのだろうかと不安になる。「いる」と答えた人のなかでも、友人の捉え方には大きな違いが見られる。友人との一般的なつきあい方を見てみると、「一緒にいると安心でき、なるべく争いごとをせず、わりとあっさりした関係でいる」といったことが男女に共通して現われてくる。他方、「友達が悪いことをしたら注意する」「悩みを友達にいう」「失敗をお互いにかばいあう」「友達からいろいろ相談を受ける」等では、女子の方が多くなっている。さらに、普通の友達と親友とでは明らかにつきあい方が異なり、「親友とはなんの隠し立てもなくつきあう」が、「普通の友達とはごく表面でつきあったり、心の深いところを出さないでつきあっている」ことが落合（2002）から読みとれた。

## 研究 1

### 目 的

研究 1 では、友人を「気軽につきあっているが、特別深い付き合いをしない人」、親友を「自分が思っていることをそのまま素直に伝えることができ、受け入れてくれる相互的な関係を持つ人」と定義する。友人関係がさらに広がり、深まっていく時期でもある大学生は、友人と親友をどのように受け止め、どのように付き合っているかについて検討する。

### 方 法

対象：県内女子大学大学生 126 名（1 年生 52 名 2 年生 28 名 4 年生 46 名）

実施時期：2005 年 11 月上旬

調査用紙：榎本（1997）の作成した自己開示質問紙（ESDQ）45 項目を一部修正し使用した。ESDQ は、精神的自己（知的側面、情緒的側面、志向的側面）、身体的自己（外見的側面、体質・機能的側面、性的側面）、社会的自己（同性関係、異性関係、公的役割関係の側面）、物質的自己、血縁的自己、実存的自己、趣味、意見、うわさ話で構成されている。同性の友人と親友をひとりずつ思い浮かべてもらい、それぞれの項目についてどの程度話し合っているかについて「全く話したことがない」から「非常によく話している」の 5 件法で回答を求めた。

### 結 果

#### （1）友人・親友への項目群別自己開示度について

自己開示の 15 項目群について、友人と親友での開示程度をみるために項目ごとに t 検定を行った。身体的自己（体質・機能的側面）と意見を除く全ての項目において有意な差がみられた（Tab.1）。

#### （2）榎本のデータとの比較—心理的距離と自己開示度（友人と親友）

榎本は心理的距離が異なる相手に対する自己開示の検討を行っている。「親友」「友人」に対する自己開示度の合計点を比較すると、全体的に「親友」への自己開示が多くなっており、榎本のデータと重なる部分が多かった。また、相手によって開示度は違うがどのような側面が開示しやすいか、しにくいのかという自己開示のパターンは似ていることも分かった。

Tab.1 項目群別にみた友人・親友の平均値 (M) と標準偏差

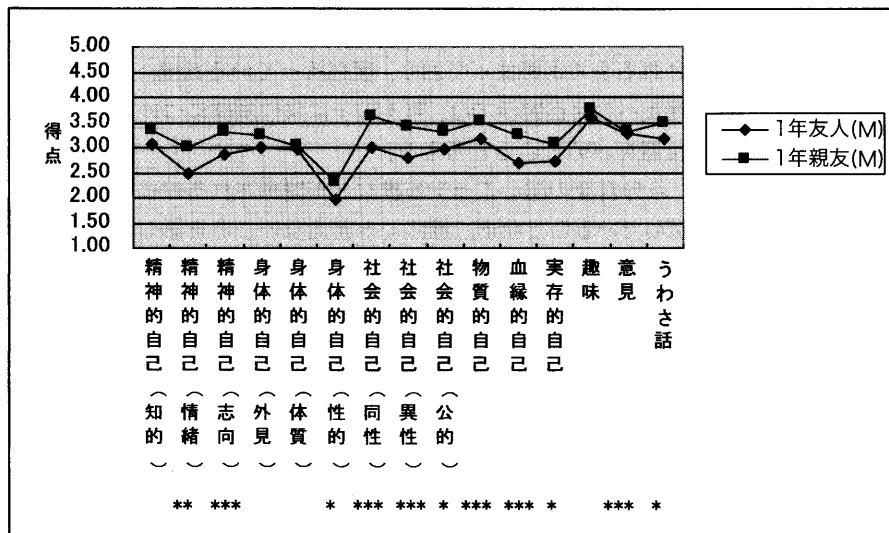
	友人 (M)	友人 (SD)	親友 (M)	親友 (SD)	t 値
精神的自己 (知的)	3.04	0.81	3.30	0.95	3.19**
精神的自己 (情緒)	2.57	0.94	3.12	0.99	5.58***
精神的自己 (志向)	2.90	0.83	3.41	0.98	6.98***
身体的自己 (外見)	2.96	0.91	3.25	1.12	3.87***
身体的自己 (体質)	2.90	0.80	3.01	0.91	1.39
身体的自己 (性的)	2.03	0.95	2.33	1.08	3.41**
社会的自己 (同性)	2.93	0.96	3.56	1.07	6.56***
社会的自己 (異性)	2.89	1.23	3.57	1.31	6.89***
社会的自己 (公的)	3.09	0.97	3.44	1.01	4.36***
物質的自己	2.95	0.85	3.31	0.91	5.31***
血縁的自己	2.64	0.97	3.08	1.03	4.62***
実存的自己	2.69	0.82	3.15	1.02	5.24***
趣味	3.48	0.73	3.63	0.82	2.38*
意見	3.05	0.79	3.15	0.80	1.53
うわさ話	3.21	0.83	3.48	0.96	3.48**

\*\*\*p&lt;.001 \*\*p&lt;.01 \*p&lt;.05

N=126

**(3) 自己開示度の学年差について**

年月が経つにつれ、友人関係は深まってくると考えられるが、自己開示する項目に違いがあるのかを調べるため、1年生(52名)と4年生(46名)について、データを比較した。結果、精神的自己の志向的側面、社会的自己の異性関係はどちらの学年も友人より親友のほうが開示されやすかった。また学年によって開示される項目群には違いも見られた (Fig.1, Fig.2)。



\*\*\*p&lt;.001 \*\*p&lt;.01

Fig.1 項目群別にみた友人・親友の比較 (1年生の場合)

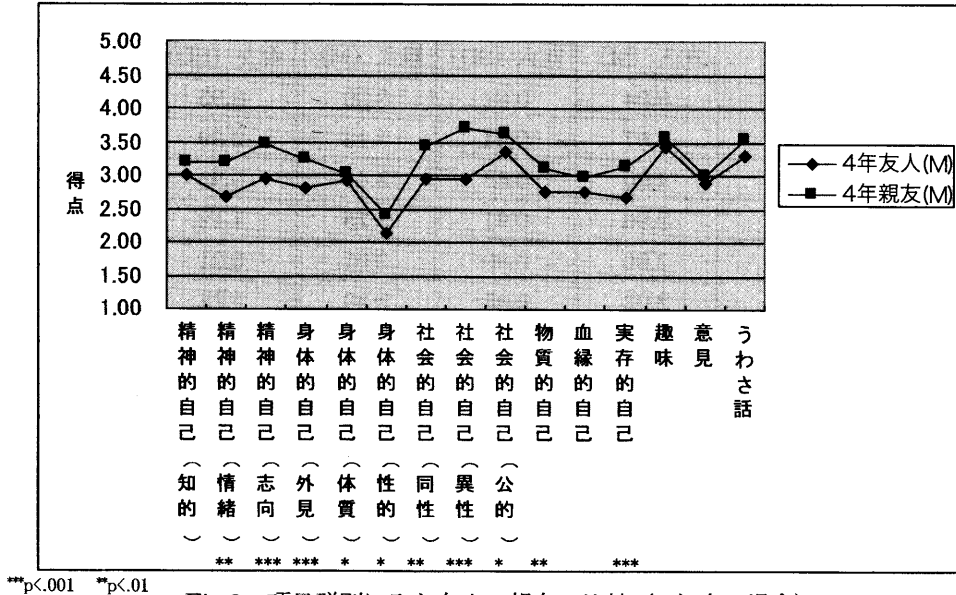


Fig.2 項目群別にみた友人・親友の比較 (4年生の場合)

#### (4) 友人と親友の因子の検討

友人と親友、それぞれへ自己開示される項目の質を検討するため榎本 (1997) の ESDQ をもとに因子分析を行った (主因子法・バリマックス回転)。

因子分析を行った結果、友人と親友では開示する項目の質に変化が見られた。主な因子の項目を見てみると、友人の第1因子は、知的な関心ごと 興味を持っている職業 現在持っている目標 趣味など、榎本の分類した「精神的自己 (知的)」「社会的自己 (公的)」「精神的自己 (志向)」意見 趣味の項目が多く見られ、異性関係や外見に対する悩みと続いている。

一方、親友の第1因子は、異性に対する気持ち 外見に関する悩み 性的なこと 心を傷つけられた経験など、榎本の「社会的自己 (異性)」「身体的自己 (外見)」「身体的自己 (性的)」「精神的自己 (情緒)」に分類されるものが納まっており、現在持っている目標、生きがいや充実感などがそれに続く。特に、親友への自己開示では、第1因子に異性関係についての項目が多く含まれており、これが重要な位置を占めていると考える。

このように、友人へは、自分自身の関心ごとや目標などが開示されるのに対し、親友へは、異性関係や性的なこと、悩んでいることなど、誰にでも言えないことを話している傾向がみられた。自分自身のことを話すのは、相手がどう思うかなど不安な気持ちを伴うこともあるが、そういった心配をせずに親友には話すことができるようである。

## 研究2

### 目的

落合の友達とのつきあい方 (35 項目) を使用し、女子大学生が友人とどのような付き合い方をしているのかを調べる (4つのパターンに分類)。さらに、それぞれのパターンに入っている学生がどのような自己開示をしているのかについて榎本のデータと比較しながら検討を試みる。

## 方 法

対象：県内女子大学大学生 126名（1年生 52名 2年生 28名 4年生 46名）。

実施時期：2005年11月上旬

調査用紙：落合（1996）の友達とのつきあい方に関する35項目を使用した。友達とつきあうとき、自分が感じたり考えたりすることのどの程度あてはまるか、「全くあてはまらない」から「かなりあてはまる」までの5件法で回答を求めた。

落合・佐藤（1996）は、第一次分析によって得られた6因子間の相関と、因子の内容を比べると、6因子間の関連は均等ではなく、因子間にまとまりがあると考えた。そこで、友達との付き合い方の特徴をさらにまとめるために、二次因子分析を行っている（Tab.2）。

Tab.2 友達とのつきあい方に関する二次因子パターン（落合・佐藤 1996）

第Ⅰ二次因子	第Ⅱ二次因子
第1因子（非防衛的）	第2因子（全方向的）
第4因子（積極的相互理解）	第6因子（被愛願望）
第3因子（自己自信）	第5因子（同調）

（※第Ⅰ二次因子の第1因子は逆転項目の因子のため、非防衛的としている）

第Ⅰ二次因子は第1因子、第4因子、第3因子で構成された要素である。これらは、『人とのかかわり方に関する姿勢』という外に見えにくい、内面の覚悟や姿勢の因子である。第Ⅱ二次因子では第2因子、第6因子、第5因子で構成されており、前とは対照的に『自分がかかわろうとする相手の範囲』を表す因子という外的な面にかかわる因子といえる。落合・佐藤（1996）は、第Ⅰ二次因子を縦軸、第Ⅱ二次因子を横軸とし、Fig.3のように二次元によって構造化された4つのパターンに分けている。

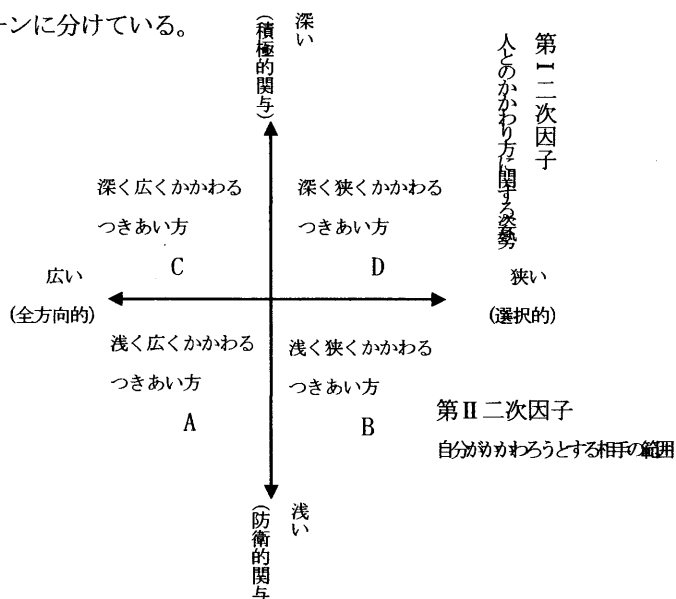


Fig.3 友達とのつきあい方を構成する2次元と  
つきあい方の4パターン（落合・佐藤 1996）

## 結 果

①『人とのかかわり方に関する姿勢 (第1・第4・第3因子)』と、②『自分がかかわろうとする相手の範囲 (第2・第6・第5因子)』ごとに3因子の得点を加算し、項目数で割った値を個人の得点として算出した。これを平均値 (第Ⅰ二次因子 3.07 (0.39), 第Ⅱ二次因子 3.43 (0.51)) 以上をH, 平均値未満をLとして、①と②を組み合わせる4パターン (A～D) に分類した結果、パターンA (36人: 第Ⅰ二次因子 M 2.80 (0.22) 第Ⅱ二次因子 M 3.80 (0.23)), パターンB (26人: 第Ⅰ二次因子 M 2.69 (0.25) 第Ⅱ二次因子 M 3.00 (0.45)), パターンC (29人: 第Ⅰ二次因子 M 3.37 (0.20) 第Ⅱ二次因子 M 3.84 (0.27)), パターンD (35人: 第Ⅰ二次因子 M 3.37 (0.27) 第Ⅱ二次因子 M 3.04 (0.30)) に分かれた。それぞれのパターンに入った学生がどのような自己開示をしているのかを示した結果が Tab.3 である。

Tab.3 4 パターンに入った学生ごとの自己の側面別開示度

	A (M)	A (SD)	B (M)	B (SD)	C (M)	C (SD)	D (M)	D (SD)
精神的自己 (知的)	2.98	0.97	3.12	0.86	2.78	0.66	3.24	0.67
精神的自己 (情緒)	2.40	0.96	2.83	0.98	2.37	0.84	2.70	0.94
精神的自己 (志向)	2.76	0.98	2.96	0.70	2.67	0.76	3.19	0.73
身体的自己 (外見)	2.70	1.01	2.92	0.86	2.98	0.79	3.25	0.90
身体的自己 (体質)	2.69	0.85	2.96	0.79	2.85	0.76	3.13	0.76
身体的自己 (性的)	1.89	0.97	2.17	0.89	2.05	1.10	2.07	0.85
社会的自己 (同性)	2.71	1.05	3.15	0.79	2.79	0.84	3.10	1.04
社会的自己 (異性)	2.37	1.33	3.18	1.27	3.01	1.16	3.12	1.03
社会的自己 (公的)	2.87	1.01	3.20	0.98	2.75	0.84	3.51	0.87
物質的自己	2.62	0.94	3.05	0.75	3.00	0.73	3.18	0.83
血縁的自己	2.39	0.94	3.08	0.88	2.25	0.97	2.90	0.90
実存的自己	2.56	0.94	2.63	0.83	2.67	0.62	2.88	0.82
趣味	3.30	0.89	3.46	0.61	3.52	0.70	3.64	0.64
意見	2.96	0.78	3.13	0.69	2.80	0.68	3.28	0.90
うわさ話	2.94	0.93	3.27	0.79	3.26	0.70	3.39	0.81

続いて、4パターンと自己の側面別開示度について、1要因の分散分析を行ったところ、社会的自己の異性関係 ( $F = (3, 122) = 3.29, p < .05$ )、公的役割関係 ( $F = (3, 122) = 4.54, p < .01$ )、物質的自己 ( $F = (3, 122) = 2.97, p < .05$ )、血縁的自己 ( $F = (3, 122) = 5.51, p < .001$ ) において主効果が認められた。差が出たものについて、有意水準5%でTukey法を用いて多重比較を行ったところ、社会的自己の異性関係はA・B、A・D間に、公的役割関係はA・D、C・D間、物質的自己はA・D間、血縁的自己はA・B、B・C、C・D間で傾向が見られた。

パターンAは「浅く広くかかわるつきあい方」であり、パターンDの方は「深く狭くかかわるつきあい方」である。AとDのかかわる方向は全く逆である。異性関係の悩みや今までの恋愛経験などは、自分の価値観や思いも当然影響してくるため、パターンAの学生は、本音を出さずに付き合おうとしているが、パターンDの学生は、限られた相手と分かり合おうとする付

き合い方であり、後者の方が開示されやすい傾向にあると推測できる。公的役割関係の側面では、A-D, B-D, C-D の間に差が見られた。公的役割関係は、「職業適性」「興味を持っている業種や職種」「人生における仕事の位置づけ」の3項目で構成されている。大学生はこれからの進路など悩みも多く出てくる時期であり、友人との間でもこのような話をしていると考えられるが、パターンDに入っている学生は全てにおいて高い得点差をみせている。このことから、限られた相手と積極的にかかわろうとする人は、これからの進路や興味を持っている職業のことなどについてもしっかりと話し合っていると考えられる。

また、物質的自己ではA-D間に、血縁的自己ではA-B, B-C, C-Dとの間に有意差が認められた。物質的自己はこづかいの使い道や自分の趣味に関する事など友人関係において比較的开示されている項目であるが、誰とでも付き合おうとするパターンCの学生よりも、その中で限られた友人と付き合おうとするパターンDに入っている学生のほうがさらに開示していると言える。

一方、血縁的自己は「親の長所や短所」「家族に関する心配事」「親に対する不平不満」という3項目で構成されている。3つの組合せで差が出ていることから考えると、浅くかかわろうとするパターンよりも深くかかわろうとするパターンにいる人のほうが開示しているようである。また、パターンDの学生は、これまでとは少し違った差をみせているが、Cとの間で差があることから、狭い付き合いをしているパターンの人の方が開示しているといえる。家族に関する話はプライベートな部分も多いため、浅い付き合いをしている人にとっては開示しにくい項目である。家族に関する心配事などは、どちらかと言うと多くの友人よりも限られた友人へ開示することが多くなるだろう。

## 考 察

研究1からは、榎本のESDQを因子分析し直してみると、友人と親友とでは開示している側面に質的な違いが見られた。友人へはこれからの目標や生き方、自分が興味を持っていることなどが主な自己開示の側面であるが、親友へは異性関係や悩み事、過去の経験などを開示していることが分かった。その他の項目からも、周りのことよりも自分の内面を語っている傾向が読み取れ、自分の内面的なことを語る相手は友人よりも親友であると言えるだろう。

また、友人ではよく開示されている項目群が、親友では開示される程度が低いというのは、親友という間柄上、もうすでに語りつくしている内容であるとも考えられる。

研究2では、落合の友人との付き合い方で4つのパターンに分類し、この4パターンに入った学生が友人に対してどの側面を開示しているのかを検討してきた。

これらの項目群の内容は、プライベートなこと、自分の価値観や意見などについてであった。4つのパターンごとにとつきあわせてみると、Dの「深く、狭くかかわるつきあい方」をする学生との間で多くの差がみられることが多かった。これは友人と「深く、狭くかかわるつきあい方」をしている人であり、自分のプライベートな内容や価値観などを相手へ開示しているということになる。こういった内容の話は、自分の内面を外に出すことになるので、自分の本音を出さずに友達と付き合おうとする人は開示しにくいだろう。また、深くかかわる付き合いでも、友達の皆に言うのではなく限られた人とかわる付き合い方をする学生の方がより開示している。それだけ普段話にくい内容を口に出しているのではないだろうか。榎本(1997)は、なかなか話す相手がいない話題として、「生き方や将来に関すること」「自分の本当の性格や欠

点に関すること」をあげている。その理由として「自分の思いを人に話すのは恥ずかしい」や「自分の気持ちをわかってもらえるかどうかわからないから」など、相手の反応を気にするので話し難い内容となることが分かる。

今回は、友人を「気軽につきあっているが、特別深い付き合いをしない人」とし、親友を「自分が思っていることをそのまま素直に伝えることができ、受け入れてくれる相互的な関係を持つ人」と定義した。友人と親友とでは開示する程度はもちろん違っていたが、友達との付き合い方も自己開示に影響を与えている（第2研究）。落合の4つのパターンで見ると、AとBの浅く関わるつきあい方の人がこれに当てはまり、親友はDの深く、狭いつきあい方をするパターンの人といえることができるであろう。この度の定義は、少し粗いものだったので、学生の受け止めた友人、親友についての定義は異なってくる可能性も大きい。今回は、同性の友人と親友の数も聞いているが、友人と親友の人数が同じ人もいれば全く違う人など結果も様々で、各学生が思い描いている友人と親友はどんな人なのかということをしっかりと押さえながら調べる必要があるように思う。

また、落合の4つのパターンについて今回の研究では、友人への自己開示に焦点を当てて調べた。親友についての自己開示のデータも合わせて検討するならば、親友とはどのような付き合い方をし、どのような自己開示をしている人なのかということも、もっと詳細に比較することができるだろう。

## 文 献

- 安藤清志 1989 社会心理学パースペクティブ 1 個人から他者へ 誠信書房
- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 榎本博明 1986 パッケージ性格の心理 第五巻 自分の性格他人の性格 ブレーン出版
- Jourard, S.M 1959 Self - disclosure and other cathexis Journal of Abnormal & Social Psychology 244-247
- Jourard, S.M 1958 A study of self-disclosure. Scientific American 77-82
- 國分康孝 1997 「頼れる自分」になる心理学 三笠書房
- 松島るみ 2004 青年期における自己開示を規定する要因の検討 風間書房
- 根本橋夫 西尾佳奈 2001 大学生における親友に対する女子大学生の自己開示 東京家政学院大学紀要 41 197-203
- 落合良行 2002 青年の心理学[改訂版] 有斐閣
- 落合良行 佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究 44 55-65